

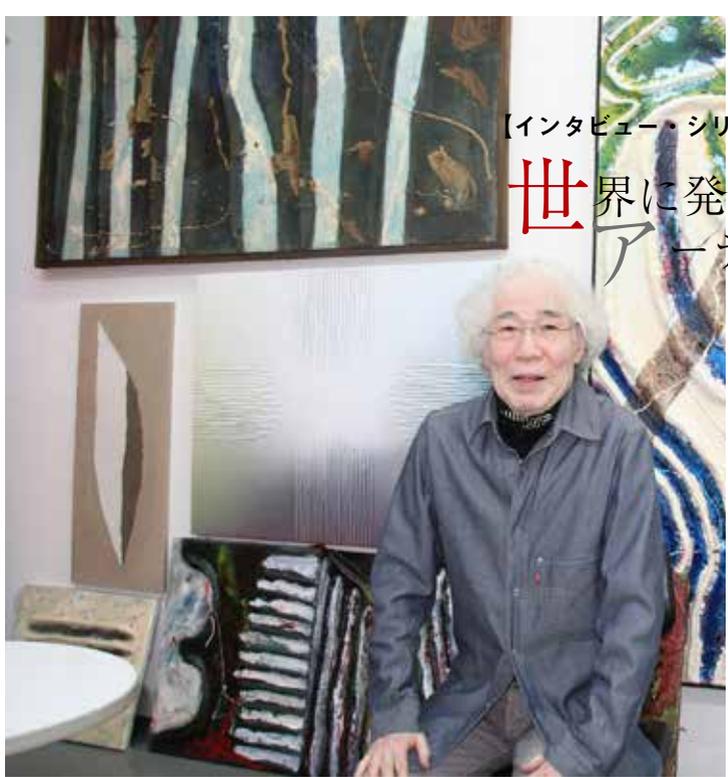
世界に発信する アーティストたち

No.11

前川 強

Tsuyoshi MAEKAWA

ドンゴロスから始まり一貫して
布を素材とした独自の表現を貫く前川強



大阪万博（EXPO70）のシンボルタワーとして制作された
岡本太郎「太陽の塔」が残されている万博記念公園（吹田
市）から、そんなに遠くない箕面市の静かな住宅街に前川
強のアトリエがある。大阪万博よりも以前、1954年に
設立された具体美術の『第二世代』の作家として59年から
72年まで毎年出品を続けた前川強は、現在も、旺盛な制作
活動を続けている。近年、具体美術の活動が国際的に再評
価され、前川にもまた新たな注目が集まっている。

——ちょうど大阪市内の画廊で
「前川強展 ― 具体から今―」と
いう展覧会を見てきたところで
すが、タイトルの「今」という
言葉が示すように新作も積極的
に制作していらっしゃいますね。
立体的な新しい作品も展示して
ありました。

前川 ご覧になったんですか。
それはありがとうございます。
具体時代の大作と、これまでの
傾向の異なる作品も並べてみま
した。

——今も積極的に制作を続けて
いらつしゃいますが、パリ在住
の松谷武判さんと共に具体美術
の数少ない第二世代の現役作家
ということになりますね。

前川 そうですね。松谷さんは
少し後輩になりますが、彼が、
ボンドの作品を吉原先生に見せ
ているところも知っています。
先生は冗談を言いながら評価し
ていましたが、冗談が多いほど
いいわけです。無視されたらも
う終わりなんです（笑）。吉原
先生というのはそういう方なん
です。

——接着剤のボンドは当時、ま
だ出たばかりの新しい素材だと
聞いていますが、前川さんも
ドンゴロス（麻袋）を使った作
品の襞を維持するためにボンド
をお使いになっていますね。

前川 ああ頃は、ほんとうに出
たばかりの接着剤で目新しいも

のでしたね。

——ところで具体美術に出品す
るには、代表である吉原治良の
厳しい眼をパスしないといけな
いそうですが、59年から出品な
さっていますか、どのように決
まったのですか。

前川 最初は1959年に京都
市美術館で行われた第8回具体
美術展に出品しています。その

時はまだ会員ではなかったです
ね、会員になったのは62年から
です。具体美術は普段は外
部の作家は誘わなかったのだ
が、あの時は会場も広がったの
か、公募展のように作品を募る
ということでした。私は具体美
術の嶋本昭三さんを知っていた
ので、ちょっと出してみたらと
言われて出品したら、ちょっと

いい場所に展示していただいた
というのが始まりでした。そ
れで、その展覧会の初日に行く
とロビーの奥の方に吉原さんと
奥さんが座っていました。それ
を見て心臓がドキドキしまし
た。そうしたら先生が呼んでい
るといので、挨拶に行くと、
仕事のこととかいろいろ聞かれ
て、物凄くご機嫌でした。それ
を見ていた会員の友達にも「気
に入られているよ」と言われま
した。

——実際、作品が気に入られた
ということでしょうか。

前川 だけど、その展覧会はそ
れで終わりました。まだ会員に
もなっていないのでした。それ
で、次は先生に作品を見てもら
おうと電話をしたら、じゃあ持っ
てきたらと言われたので、それ
で慌ててトラックを手配して作
品を持って行ったわけです。

——どのくらい持って行ったん
ですか。

前川 20点くらいですかね。大
きなのは200号の作品ですが、
ほとんど大作でした。

——それは量的にも凄いですね。

前川 作品を見てもらおうと、
それまで一生懸命描いていまし
たからね。それを運んで、最初
は吉原先生の家の表にズラッと
並べたんです。そうしたら、
そこは商店街だから中に入れて
くれと言うことになりましたね。
松の木のとこに並べましたが、
作品が大きすぎて入らなかつた
ので入口の一部を壊して、とに
かく入れました。それで絶賛さ
れたわけです。一つひとつ褒め
て頂いて、こちらも恐縮してし
まいました。この色がいいと言
われましたが「先生それは絵具
そのままです」というと「それ
でいいのや」という調子でした。
それで、次の具体展があるから
その時みんなに見せるから、作
品は全部置いとけと。で、その
日にまた行くと、そこで具体展
に出品する作品が選ばれるん
ですが、ところが僕の作品はも
う選んであって、どうやというん
ですよ。全部会場の高島屋を持っ
ていくというんです。僕もズツ
と一緒に展覧会について行った



白のうねり 1625 × 2590 1962年

ど こを見ても各作家が
独自の作品を発表している、
そんな公募展ないですからね。
これが具体だと思いました。



《大地のシンフォニー》F200

略歴

- 1936 大阪に生まれる。
- 1959 吉原治良に師事、第8回具体展。以降、全具体展出品
- 1962 具体美術協会会員となる
- 1963 個展（大阪・具体ビナコテカ）
- 1965 具体バリ展（パリ・スタドラ一画廊）
- 1966 具体オランダ展（デンハーグ・オレツツ画廊）
ローザヌ国際展（カントナル・デ・ボウザール美術館）
具体オランダ小品展（ロッテルダム・デザインハウス）
具体オーストリア展（ウルフェンガッセ・ハイデ・ヒルデブラント画廊）
- 1967
- 1968 夜だけの具体美術展（宮崎）
- 1970 具体万国博展（万博みどり館）
- 1971 アメリカ、ヨーロッパ遊学
- 1975 第10回ジャパンアート・フェスティバル（オーストラリア他）
- 1978 アートナウ'78（兵庫県立近代美術館）
- 1979 吉原治良と具体その後（兵庫県立近代美術館）
- 1981 第15回現代日本美術展・東京都美術館賞受賞（東京・京都）
ジャパンアートフェスティバル'81（ロンドン、東京、大阪）
- 1982 第4回ジャパンエンバ賞美術展・国立国際美術館賞受賞（芦屋・エンバ美術館）
第14回日本国際美術展・京都国立近代美術館賞受賞（東京、京都）
第5回現代日本絵画展・大賞受賞（宇部）
- 1986 具体一行為と絵画帰国展（兵庫県立近代美術館）
- 1988 個展（大阪・山木美術）
- 1989 幻の山村コレクション展（兵庫県立近代美術館）
現代の造形・特別企画展（和歌山県立近代美術館）
特別展〈具体〉未完の前衛集団（渋谷区立松涛美術館）
- 1990 具体展（宮城県美術館）
- 1992 具体Ⅱ、Ⅲ（芦屋市立美術博物館）
- 1993 具体Ⅱ、Ⅲ（芦屋市立美術博物館）
- 1999 「具体」展（フランス国立ギャラリー・ジュ・ド・ホーム）
- 2001 「現代美術への招待～日本の前衛・60年代～」(鳥取県博物館)
- 2002 兵庫県立美術館開館記念展（兵庫県立美術館）
- 2005 兵庫県国際絵画コンペティション（兵庫県美術館）

んですけど、他の出品者にお前の個展みただなと皮肉を言われるんですよ。それでだんだん減らされていつて3点か4点に絞られましたけどね。

——最初から、破格の扱いということじゃないですか

前川 吉原先生は、そういうところがありませんでしたね。作品が気に入るからいいか。自分が気に入ったら物凄く調子いい。と

てみたりしました。クレールとかミレーも使っていて、そういう作品も好きでしたね。自分もそういう雰囲気のある作品を作りたいと憧れていましたからね。ですから、モダンアートに出していた時はそのまま使っていて油絵具で描いたり、少しは、縫い合わせたりしたかもしれないが、それがいつも審査を通りましたから、評価はよかったですね。

——そこから、襲によるダイナミックな表現へと変わり、具体時代の作品は多くが美術館に収まっていますね。それが、1972年に吉原治良の死去と具体美術の解散で、作品は変化していく訳ですね。しかし、ドンゴロスから始まって一貫しているのは、布の素材をいかした作品が続いているということですね。

前川 やっぱり拘りがあるんですね。うね、具体が解散するまでずっと続けてきた表現が、解散後は、柔らかい布を素材としてミシンで細かく縫って襲を作っ

ころがちよっと気に入らないと、とことんやつつける感じ。女の人でも泣いているのにまだ言っているということもありました、妥協がなかったですね。とにかく作品本位でした。新しい人がこれからこういう風にやっていたか、自分の持論とか、考えを言うでしょう、そうすると物凄く嫌がるんですね。だから作って見せてくれと。だから

ていくデリケートな感じの作品になりました。それによって現代日本美術展やエンバ美術コンクール、日本国際美術展で入賞が続きましたが、その変化が非常によかったですよ。それでこの表現が長く続きました。

——ドンゴロスの迫力のある表現から、いきなりデリケートな世界に転換したわけではないんですね。

前川 それはいろいろ試行錯誤はしましたよ。吉原先生が亡くなったことも、具体美術が解散したことなども、当時はショックでしたが、そこから次の展開に作家として歩み出していかなくてはいけないということも考えていましたから。

——こまかく線を描くように縫っていくという制作方法、そしてその布を皺がないように張っていくという作業は、オリジナルなものですが、大変な作業でもありますね。

前川 具体の仲間からは、縫うことでも作品になるんだと感心されましたね。だけど作品の端

ら会員の作家はみんな次の展覧会まで黙々と作るだけです。何もやってもいないような顔をしてね。

——結果的に、最初から具体展に歓迎される形で参加していますが、やはり当時、具体美術というものは、大きな存在でしたか。

前川 他とはぜんぜん違いましたね。具体は衝撃も強かったです、

を伸ばして皺を作らない様に木枠に張るのも大変なんです。少しでも皺ができるとうまく張り直して、そういう失敗を乗り越えて、それができた時には自分でも満足感を強く感じます。この作品は誰でも真似して作ってくれと、だけどなかなかこまではできないものなんです。

——そして最近では、大阪の個展でも発表したような、ネット状の素材を使った立体的な作品が登場してきたわけですね。

前川 そうですね。少し具体時

他の公募展なんかお話しにならない、未だに比べようのないグループでした。展示会場に行くところ、どう見ても元永定正は元永定正だし、白髪一雄は白髪一雄、どこを見ても各作家が独自の作品を発表している。そんな公募展がないですからね、これが具体だなどと思いません。それまでは上原智祐さんも嶋本さんも出していたモダンアート展に僕も出していました。材料としてはドンゴロスを使っていたんですが、まだその時は襲みたいなのは作っていませんでした。

——具体には、初めて襲のある作品を出品して、つまりは前川作品をアピールしたわけですね。襲状に盛り上げたドンゴロスをキャンバスに張りつける、その上からペンを流し込むというのは、当時はまったく新しい表現だったわけですね。素材にドンゴロスを使ったきっかけは何ですか。

前川 ああいう荒い表面のものが好きだったんですね。はじめはそのまま油絵具を塗ってやっ

代のダイナミズムに少し戻っているところがあるかもしれないですね。

——これからはアメリカなどの展覧会が計画されているようですが、現役作家としてパフォーマンスなどもお考えになっていますか。

前川 まだ具体的にはなっていないんですが、できるだけ作品をアピールできればと思っています。——これらのご活躍を期待しています。



《ネットに二つの黒》F150